

## 二重性を設える

——セルトーの日常的実践論からゴフマンの共在研究へ——

草 柳 千 早

### はじめに

日常生活に浸透する権力、その標的として身体が発見され規制されていく歴史過程を、M. フーコー (1975) は描いた。時代と共に洗練されていく権力とその作用を探究したその研究は、日常的な権力への私たちの視座、感受性と想像力を刺激し続ける。私たちは権力の網の目の中で生きている——この自己像は、翻って次の問いを喚起する。では、その中で私たちはいかに振る舞い生きうるのか。これは M. セルトー (1990) が「日常的実践」の名の下に追究した問いでもある。この問題を日々の生活に照らして考えるには、日常の相互作用に照準を合わせることが有用であり必要である。

私たちの相互作用場面を独自の研究対象とした社会学者に E. ゴフマンがいる。対面的相互作用とその秩序に関する彼の研究は、私たちが日々いかに振る舞い、またそれを通して、人と人々が共に居る「共在」の秩序がいかに実現し、また揺らぎ脅かされうるかを考察した。

本稿は、上記の関心、すなわち、日常生活において身体を包囲する権力の網の目のなかで、私たちはいかに振る舞い生きうるのか、という問題関心の下で、ゴフマンの共在研究を読み直す。その一つの視角として本稿では、ゴフマンの議論を構成する主要ないくつかの概念に注目し、彼の研究に通底するあるモチーフ、仮に名付ければ「二重性の設え」というモチーフを析出する。以下では、まず本稿の課題を、セルトーの日常的実践論と問題関心を共有するものとして示し、次いで、ゴフマンに着目する方法上の理由を、ハッキングの議論に依拠して確認する。その上で、ゴフマンに目を向け、その著作から主要ないくつかの概念とその論理を考察し、上記のモチーフを析出する。そこで初めの問いに戻り、ゴフマンの議論から、私たちはいかに振る舞いうるか、その可能なありようの素描を試みる。

### 1. セルトーの日常的実践への関心とゴフマンの共在研究

私たちの身体が「従順さ」に向けて、細部にわたり訓練され恒常的に取り締まられる対象となっていくことを、フーコーは、ヨーロッパ社会の歴史のなかから描き出した (Foucault 1975=1977)。だがまたその狙いゆえに、個々人が権力の対象たる身体をもって日常いかに振る

舞い生きたか、については後景に置かれる。それに対してこの問いを前景化するのが、セルトー、そしてゴフマンである。

### (1) 逆向きの問い——規律化に対して

『日常実践のポイエティーク』（Certeau 1990=2021 以下 IQ）においてセルトーは、フーコーを念頭に問う。「監視」の基盤目がいたるところにひろがり、ますます精緻化していつているのが真実なら」、それでも「一社会がそっくりそこに還元されつくされないのはなぜなのか」（IQ: XXXIX-XL=17）<sup>(1)</sup>。人々の「微細」で日常的な」どのような「手続き（procedures）」が「規律のメカニズムを相手どり、それに従いながらかならずそれを反転させる」のか。そこにはいかなる「もののやりかた（manieres de faire）」（IQ: XL=17）があるのか。セルトーは、このような人々の「日常実践」に、「反規律（アンチ・ディシプリン）の網の目」（IQ: XL=18）を形成していく可能性を見ようとする。

こうした問いは、フーコーが規律のメカニズムを詳述したのに対して「逆向き」である、とセルトーは書く（IQ: XL=17-18）。「秩序の暴力がいかにして規律化のテクノロジーに変化してゆくか」ではなく、「さまざまな集団や個人が、これからも「監視」の網の目のなかにとらわれつづけながら、そこで発揮する創造性」が「いかなる隠密形態をとっているのか、それをほりおこすこと」、それが問題だからである（IQ: XL=17-18）。

規律化という権力の方向、及びそれを描き出そうとするフーコーの問いの方向に対して、その「反転」「反規律の網の目」の形成可能性を問う、その意味でフーコーとは「逆向き」だという、セルトーのこの関心を本稿は共有する。そして、同関心は、ゴフマンにおいても、後の節で見ていくように、共有されていると考える。セルトー自身、参照した研究者にゴフマンを挙げている（IQ: XLI=25）。では、この問いに本稿がゴフマンの研究を通して接近するのは何故か。

### (2) 補完的な視座——歴史過程の探究に対して

要点を先取りすれば、本稿はゴフマンの研究を、フーコーが歴史過程において探究した事態を、共在における相互作用の水準で追究したものと捉えている。この観点は、I. ハッキング（2004）の議論に学び依拠するものである。

ハッキングは論文「ミシェル・フーコーとアーヴィン・ゴフマンの間——抽象的言説と対面的相互作用の間」（2004）で、両者の仕事を対照する。フーコーの「考古学」とゴフマンの相互作用研究とは、前者は、ヨーロッパの何世紀にも渡る歴史を、記録、言説に基づいて描き出し、後者は、対面的相互作用場面——人々が時間・空間的に身体をもって直接共在する場面——に焦点を合わせる、という点で、方法と対象両面において、極めて異なる水準で展開されている。この一見「対極」的な両者を、ハッキングは、相互に「補完的」たりうるものと捉えた。

ハッキングは、『狂気の歴史』(Foucault 1972)と『アサイラム』(Goffman 1961)、共に彼らの初期の仕事を対照する。両書の扱う事柄には共通性があり、大雑把に言えば、いずれも「狂気」「狂人」「精神病患者」「監禁」「施設収容」「治療」「医療」といった一連の事柄に目を向ける。しかし、その方法は大きく異なる。前者では、各種の記録、言説に基づいて「狂気」をめぐる歴史過程が描出される。だが、ある種の人々が生活現場でどのようにして監禁や医療の対象として選別され、実際に施設・制度のもとでどのように処遇され、またそれに対応しながら自らの置かれた状況を生きようとしたのか等といったことについては、その方法上、記録がなければ記述しえず、またそうした問題は少なくとも本書の関心外でもあった。他方、『アサイラム』は、まさに上のような問いを追究する。ゴフマンは、施設の参与観察により、被収容者たちの日常生活、そこに繰り広げられる相互作用を観察検討し、その成果をまとめた。ハッキングは、フーコーの研究を「抽象的言説からのトップダウン」、ゴフマンの研究を「対面的相互作用からのボトムアップ」と特徴づけ(Hacking 2004: 277-278)、フーコー的な仕事を補完する、ゴフマン的な視点の有用性を論じた。

かくして、ゴフマンの仕事は、第一に、セルトーがフーコーに対して逆向きのものとして提示した、日常的実践への関心、それを共有しつつ「共在」において追究するものとして、第二に、フーコーの歴史的研究の方法上の補完として、位置付けることができる。ゴフマンによる共在への接近を通じて、私たちは、人が権力の網の目のただなかでいかに振る舞うかについてひとつの視座を得、考察を進めることができるだろう。以上の狙いの下、本研究では、ゴフマンの共在研究を改めて読み直していくが、その全体を一度に網羅的に扱うのは困難であるため、本稿では、『アサイラム』とその直後の初期2著作『スティグマの社会学』(1963a)(以下『スティグマ』=ST)と『集まりの構造』(1963b)(以下『集まり』=BP)に焦点を絞り、そこで展開された議論と主要な概念群から、通底する一つのモチーフを析出し、私たちの日常的実践のあり方と可能性について考察していく。

## 2. ゴフマンにおける「二重性の設え」

### (1) 施設・組織に対する「調整」とアンダーライフ——『アサイラム』

まず『アサイラム』を取り上げる。本書は、ゴフマンが国立精神衛生研究所の客員研究員であった期間に連邦政府経営の病院で行った1年間の参与観察調査をもとに著された。ハッキングが述べたように、『狂気の歴史』が描く歴史過程からはこぼれ落ちる、施設被収容者の日常を仔細に観察し描出している<sup>(2)</sup>。

だが実のところ、その主題はかなり一般的な水準に置かれており、全制施設・組織と被収容者という関係を通して、組織と個人の関係形式、組織における個人のありようが探究されている<sup>(3)</sup>。

本書中の「公共施設の裏面生活——精神病院における苦境の切り抜け方の研究」序論で、ゴフマンは自らの関心をこう述べる。「あらゆる組織」は「活動の規制 (a discipline of activity)」とともに、「ありようの規制 (a discipline of being)」<sup>(4)</sup>を含んでおり、本論の目的は、組織における「規定されたありようの不履行 (absenteeism)」を検討することにある、と (AS: 188=199)。ここで考察されているのは、精神病院やその院内生活者に固有の問題ではなく、組織の管理下における人々のありようという、一般的な問題である。

この関心の下、ゴフマンは一對の概念、「第一次的調整」と「第二次的調整」を導入する。(AS: 188=200)。組織は参加者に対して特定の活動を行うことを期待するが、ゴフマン曰く、そこには参加者に関する非明示的仮定——参加者は期待に従って活動するような人間である、という仮定——が含まれている。そして参加者は、この仮定に対して何らかの態度を形成する。一方の極にその完全な受容、他方の極に完全な拒否を置く連続線を想定できるが、ゴフマンは、この線上の中間に生じうる可能な対応を、便宜的に上の二概念で分節化する。

個人が、組織から期待されるありようを受け入れている場合、その人は組織に対して「第一次的調整」を保持している、という。この場合、人は「特定の組織に要請された活動に、それも指定の条件の下で、協調的に寄与」する、「ノーマルな」「プログラムされた」「嵌め込まれた」構成員となる (AS: 189=200)。他方、「第二次的調整」とは「組織内の成員が非公認の手段を用いるか、あるいは非公認の目的を達するか、あるいは双方を同時にするかして、彼の為すべきこと、得るべきもの、したがって彼の然るべきありようをめぐる組織の仮定を回避すること」、「施設が個人に対して自明としている役割や自己から彼が距離を置く際に用いるさまざまな手立てのこと」である (AS: 189=201)。「規定を躲すことは、アイデンティティを躲すこと」(AS: 187=197-198)であり、まさに「規定されたありようの不履行」と言えよう。

第一次的調整は、組織の安定性に寄与する (AS: 199=209)。人は、組織の円滑な維持運営に役立つ、管理の容易な成員である。他方、第二次的調整では、人は組織からの期待を受け入れていないが、しかしそれは必ずしも組織の安定を脅かすことに繋がらない。ゴフマンが参与観察を通じて見出したのはこの点である。ゴフマンは第二次的調整には、「攪乱的 (disruptive) 調整」と「自制的 (contained) 調整」があるとする (AS: 199=210)。前者は文字通り、組織の円滑な作動を攪乱する。反乱や反逆等はわかりやすい例である。後者は、「抜本的な変化を起こすような圧力を導入することなく既存の制度的構造に適合するという特徴を第一次的調整と共有」し、「攪乱回避の努力という明白な機能」を持つ (AS: 199-200=210) とされる。つまり、組織の期待に反する振る舞いは必ずしも発動されないばかりか、むしろ組織の安定性を維持する努力が払われる。だが、第一次的調整と決定的に違うのは、個人はあくまで組織の期待を受け入れておらず、その規定を躲す者であり続けている点である。ゴフマンは、この自制的な第二次的調整に注目し、その振る舞い方を「便法 (practices, ないし make-do's)」と呼び (AS: 200, 207=210, 217)、その

実践の諸相を描いた。なお、この呼び方は、セルトーが「日常実践」に用いた語「faire avec」（英訳 making do、邦訳「なんとかやっていくこと」）（IQ: 50=106）と呼応し合う。

その描出を辿ることは本稿の目的ではないが、この概念の含意をよりわかりやすく示すべくゴフマンが観察した「便法」の例をいくつかあげる。例えば、施設内で利用できる物品を公式的な意図にはない仕方や目的のために利用し、個々人に定められた生活条件を勝手に修正改善すること。「利用できる」組織内仕事の割り当てを受け入れ、そこから当人なりの仕方で利益（いわゆる「役得」）を得つつ、仕事は本来の目的のために遂行されているという印象を維持すること<sup>(5)</sup>、などである。

かくして管理監督側からは感知しづらいという意味で隠密の生活が被収容者たちの日常に創出される。これをゴフマンは「アンダーライフ（under life 裏面生活）」と呼んだ。彼が観察したような全制施設では被収容者は、外部世界から切り離され一定程度まで無力化され、その生活は細部に渡って規制される。「全制的施設の権威は無数の言動の細部——たとえば服装・動作・作法——にまで及んでおり、それらの言動はたえず生じ、たえず判定される」（AS: 41=43）。このような状況下でも人々の間に、権力の作用を躲し逃れていく狡知、巧みな実践が生じ得、アンダーライフが創出されうることを、ゴフマンは浮かび上がらせた。

ゴフマンは書く。「世界が成立するところではどこでも、アンダーライフが展開する」（AS: 305=301）。組織が円滑に管理運営されるためには、成員が組織の期待にしたがって活動に従事することが必要だが、当の成員は必ずしも組織の期待するありようを全面的に受け入れているとは限らない。自制的第二次的調整がなされていても、そのことは、まさにその性質ゆえにわかりづらい。組織成員の世界は、監視の目が統べる表面だけに留まっていない。ゴフマンはこの一般的な含意を指摘する。「おそらく、ある営造物（施設、組織）がその構成員に参加することを義務づけているか許容している活動はいずれも、当該組織にとっては潜在的な脅威である」（AS: 312=308）（（ ）内筆者補足）<sup>(6)</sup>。これは不可避の皮肉である。人々は、厳しい監視、管理統制の只中で二重性を設える。そこでは組織的要求の履行と不履行が同時に進行している。

### (2) 「信頼を失う事情」とダブル・ライフ——『スティグマ』

次に『スティグマ』を取り上げる。本書で導入された「スティグマ」等の諸概念は、差別や偏見に晒されてきた多様な人々に関する後の研究に多くのインスピレーションを与えてきた。だが、ここでもゴフマンの関心は、特定のスティグマを負った人々固有の状況よりも、人々の一般的な関係形式にある。それは、『アサイラム』においては、組織・制度とその管理下にある個人の関係であったが、本書では、特定の組織や制度を背景としない人々「常人（the normals）」と（スティグマを付与される）個人との関係、両者が同一の社会的状況に直接身体的に居合わせる場面（ST: 12=30）、すなわち共在における関係である。



ゴフマンはまず社会的アイデンティティを二層、「バーチャルな社会的アイデンティティ」と「アクチュアルな社会的アイデンティティ」に分ける。この区分について簡略に述べれば、次のようなことである。私たちは一般に通常出会う人について何らかのカテゴリーや属性を想定する。これを広く「社会的アイデンティティ」と呼ぶ。私たちはこの想定から、相手に対して期待や要求を自ずと持つ。例えば、目の前の人を「教員」と捉えたなら、それに付随する期待や要求を私たちはその人について持つ。こうした期待や要求を含む仮定が「バーチャルな社会的アイデンティティ」を構成する。それに対して、その人が「事実持っていることを明らかに示しうるカテゴリー、属性」が、「アクチュアルな社会的アイデンティティ」である。そして「スティグマ」とは、未知の人が「彼に適合的と思われるカテゴリー所属の他の人々と異なっていることを示す属性、それも望ましくない種類の属性」(ST: 3=15)である。それはすなわち、「バーチャルな社会的アイデンティティ」と「アクチュアルな社会的アイデンティティ」の間の乖離を構成する(ST: 3=15)<sup>(7)</sup>。

以上を踏まえ、ゴフマンは、本書構成の軸となる区分 (Dennis, Philburn & Smith 2013: 123)、対概念を導入する。「すでに信頼を失った者 (the discredited)」と「信頼を失う事情のある者 (the discreditable)」である。前者は、「自分の特異性がすでに人に知られている、あるいは人に見られればたちどころに分かると仮定している」者、後者は「自分の特異性がその場に居合わせる人のまだ知るところとはなっていない、あるいはすぐには感知されるところとはならないと仮定している」者 (ST: 4=18) である。この違いは、主としてスティグマの可視性の差に起因する。両者は、バーチャルなアイデンティティとアクチュアルなアイデンティティの乖離がすでに露顕している者と、まだ知られていない者、と換言できる。

常人との共在場面において、両者が経験する苦境は異なっている。すでに信頼を失った者にとっては、スティグマへの常人のまなざしや態度にいかに対処するかが問題となる。当事者は、そこで生じる気詰まりや緊張を管理しなくてはならない (ST: 42=80)。他方、信頼を失う事情のある者が直面するのは全く別種の問題、すなわち、未だ知られていない「自分の欠点に関する情報をどう管理するかという問題」(ST: 42=80) である。「欠点」を他者に示すべきか否か、偽るべきか否か、誰に、どのように、いつ、どこで、等々、自己についての情報管理という問題である (ST: 42=81)。

ゴフマンは、信頼を失う事情のある者のさまざまな情報管理のあり方を考察するが、本稿の目的にとってより重要なのは、情報管理をめぐって、「完全な秘密」と「完全な情報開示」(ST: 74=129) という両極の間にさまざまな可能性があるということ、そして、その連続線上の中間に、さまざまな様態の「二重生活 (double life)」(ST: 76=132) が成立しうることである。ゴフマンは、信頼を失う事情のある人々の間で広く用いられている戦略として、「世界を二分し、何も告白しないでおく多人数からなるグループと、いっさいを告白しさらにその援助に依存する少人数から

## 二重性を設える

なるグループに分けて自分の危険に対処する」という方策を挙げる (ST: 95=161)。人は、自己に関する巧みな情報管理の実践により、一方で、スティグマを開示せず、つまり他者たちの期待／仮定の範囲に自らの表面を適合させ、共在場面を切り抜けながら、他方で、秘密を明かした人々と別の生活を共有する、という「ダブルライフ」を設えることができるのである。

この「ダブルライフ」が、『アサイラム』の施設被収容者における、表向きの生活と「アンダーライフ」の二重性と形式的に同型であることは明らかであろう。

### (3) 状況適合性の規則と「関与シールド」——『集まり』

『集まりの構造』は、「他者と居合わせた時の個人の行為に関する公共の秩序」(BP: 242=260)に焦点をあてる。その主要な目的は、「「精神病」者の徴候学的現象が時として精神障害の性格よりもむしろ公共の秩序の構造に関係していることを示すこと」(BP: 242=261)と記され、この点で、本書も『狂気の歴史』を補完する研究として読める。人のどのようなあり方が、私たちに「精神病」と感知させるのか。本書においても、このような問いを立てつつ考察されているのは、きわめて一般的な問題、すなわち、人々が居合わせる集まりにおける秩序・規則と個人のありようとの関係である。共在で働く規制はそこにいる人々をどのように支配しているかという問題が検討される。

ゴフマンによれば、あらゆる状況には「状況にふさわしくあれ」という規制が働いている。この「状況適合性の規則」は、「状況内における個人の関与配分を支配 govern」している (BP: 243=262)。逆に言えば、個人が状況にふさわしくある（と判断される）のは、関与配分の適切さによってであり、この関与配分を「支配」しているものをゴフマンは「状況適合性の規則」と呼んだ。つまり、状況適合性の規則への適合性が状況における人々のあり方の適・不適を分ける。

ここで論じられている「関与 (involvement)」とは、「ある個人がある行為（中略）をするのに調和のとれた注意をはらったり、あるいははらうのを差し控えたりする能力」のことである (BP: 43=48)。社会的場面には、その場面の本質的要素といえる活動、「場面にかかわりのある活動」(BP: 35=40)が見出される。例えば、大学のゼミ中、学生が講読文献について他の学生と話し合うことは「場面にかかわりのある活動」であるが、手元の機器でゲームに没頭することはそうではない。場面にかかわりのある活動に従事することは、その活動に「認知的かつ情緒的にかかわりをもつこと」、「自分の心理的・生物学的資質をそれに向ける」ことであり、それが「活動に関与する」ということである (BP: 36=40)。状況にふさわしくあるには、関与配分を適切に行う必要がある。関与は「集まりへの義務」「集まりへの帰属意識」(BP: 244=262)を示す。学生は、議論に参加しなければならず、ゲームに熱中しているならば、集まりへの義務、帰属意識が不十分と看做されよう。帰属意識の問題は、個別の状況を超えて、組織に対する個人の関わり方の問題に繋がっている (BP: 244=262-263)。状況で要請されるものには「道徳的性格が付与されて」

おり、「個人はそれを守り維持する義務」があり「そうするのを望むように期待されている」(BP: 240=258)。

かくしてゴフマンは、関与配分や関与対象に関する規則と関与のあり方について詳しく検討している。だが、それよりもここで注目したいのは、「関与シールド」という概念／発想である。

ゴフマン曰く、関与者の心は社会的場面の要求するところにあることもある (BP: 38=43)。実際、私たちはさまざまな理由や事情で、自分が参加している状況で関与すべき活動に適切に専心できないことがある。この場合の解決法をゴフマンは二つ挙げる。一つは、関与規則に承服できないしその気もないことを前もって自覚し最初からそのような状況に参加しないこと、もう一つは、不適切な関与を隠し、適切な関与を装うことである (BP: 38=43)。前者は、そもそも参加しないという選択なので、今は脇に置くとして、後者について考察すべく導入されるのが「関与シールド (involvement shields)」(BP: 38=42) という概念である。

関与は直接知覚できず、「身体表現」「慣習的記号」「関与表現 (involvement idiom)」によって推測できるにすぎない (BP: 37-38=41-43)。そこで、人は、身体表現によって「自分の関与配分に関する情報を伝達」するのであり、またそれは「義務的」なものとなる (BP: 37=42)。このことは、逆に言えば、「関与表現」として、他者から「適切」そうに見えていれば、心中で別の事を考えていても、あるいは別のことをしていてもさして問題にならない、ということの意味する。

「関与シールド」とは、他者の知覚を遮るバリアであり、「実際には状況義務を怠っていないが、その状況にふさわしい関与を維持していると印象づけることができる一つ的手段」(BP: 41=45) である。アングロアメリカ社会における例に挙げられているのは、一時的な隠れ場所としての寝室と浴室である。あらゆる社会的施設にはこの種のシェルターがあるとして、病院内の隠れた喫煙所等、アサイラム的な例も挙げられる。携帯可能なシールドとして新聞、また手など身体の一部も利用できる (BP: 38-40=42-44)。いずれも「ふさわしくない関与を隠して適切な関与を装う」(BP: 37=42) ために利用される。

「関与シールド」概念が、『アサイラム』と『スティグマ』で示された二重性と繋がっていることは明らかであろう。関与シールドの利用は、具体的な便法＝実践である。本書では、共在における「関与」という水準で、「二重性の設え」はいかにして可能かが示された。

### 3. 「二重性の設え」を構成する論理

ここまで、ゴフマンの初期3著作を順に見ながら「二重性の設え」というモチーフを析出した<sup>(8)</sup>。以下では、「二重性の設え」を構成する論理を、3著作横断的に改めて整理し再構成してみたい。4つの論点、1) 関係性の枠組み、2) 連続線上の対極とその中間域、3) 「パルチザン」の視点、4) 共在経験の一般的形式、について述べる。



### (1) 関係性の枠組み——適合的な者とそうでない者

確認してきたように3著作はそれぞれ極めて一般的な主題を掲げている。『アサイラム』では、全制施設・組織と被収容者という関係を通して、組織と個人との関係形式、組織における個人のありよう、『スティグマ』では、特定の組織や制度を背景としない「常人」と（スティグマを付与される）個人との関係、その共在における関係、『集まり』では、共在、集まりにおける秩序・規則と個人のありようとの関係が考察された。

3著作を通じてほぼ同一の主題が、抽象度を上げながら繰り返し考察されていることがわかる。前2作では、被収容者やスティグマを付与される事情を持つ人、つまりあらかじめ「不適切」の側に位置づけられる人々が取り上げられたが、『集まり』では、状況適合性の規則への適合性の如何によって誰もが「不適切」の側に転落する可能性がある、そのような誰でもある個人と規則との関係が考察された。

二重性を設えるのは、施設・組織管理者に対して被収容者、常人に対して信頼を失う事情を持つ者、状況適合性の規則に適合的な人に対してそうでない人、いずれも、「適合的」に対して「不適合的」な側、「問題」のない「強者」に対して「問題」のある「弱者」の側である。この関係性の枠組みの中で「二重性の設え」が問題となることが示された。

### (2) 連続線上の対極とその中間域——「忠誠」でも「反逆」でもなく

3著作いずれにおいても、一方に、組織ないし状況・場面における期待に従う、適切さが具現化している極、他方に、期待に反する、不適切さが露呈している極を置く連続線が想定された。『アサイラム』では、一方に組織から期待されたありようを受容する第一次的調整、他方に受容せず攪乱を引き起こす攪乱的第二次的調整、『スティグマ』では、「完全な秘密」と「完全な情報開示」、『集まり』では、状況適合性の規則に適合的「適切」な関与（表現）と、適合的でない「不適切」な関与（表現）。不適切さ露呈の極では、「精神病の徴候」「不適切」「不適格」といった烙印、非難や排除、偏見や差別の対象という扱いが待ち受けている。だが、両極の間にはさまざまな濃淡でグレーゾーンが広がっている。

この中間域にゴフマンは注目した。組織の期待に従っているように見えてそうではない、他者たちの期待／仮定の範囲に合わせながらもそうではない、不適切でありながらそれを隠し適切さを装う、この曖昧な領域に「二重性」がさまざまな状態で設えられる可能性、これをゴフマンは論じた。

「関与シールド」概念を強調する理由を述べる箇所、ゴフマンは次のように書く。「私たちが対処するのは、従うべき諸規則の網の目よりも、むしろ考慮に入れるべき諸規則である。従うのか、それとも注意深く回避するのか、である」（BP: 42=47）。ゴフマンは実に巧みな表現により、私たちが規制するものへの、私たちの見方／想像力に働きかける。彼は、規則を、「従う」もの

から「考慮に入れる」ものへと読み替えさせる。二者の違いは大きい。そして規則の「網の目」は、単なる複数形の「諸々の規則」へと替えられる。本稿では「権力の網の目」という表現を用いてきたが、網の目状のものは文字通り私たちを網羅し逃れるのが難しい。それが、単に複数の諸々の規則へと解かれる。さらに、規則に対して「回避 (circumvent)」という語——困難やルールを避ける道を見つけること<sup>(9)</sup>——が選ばれていることに注意したい。この語は『アサイラム』で用いられた「躲す (dodge)」——何かを避けるために素早く動いてよけること、何かをするのを避けること、特に不誠実な方法によって<sup>(10)</sup>——と呼応し合う。規則は、従うか背くか、遵守か違反か、「忠誠」か「反逆」か (AS: 181=192)、ではなく、「回避」する、「躲す」ことのできるもの、となる。

たしかに「状況における不適切な行為」は「行為者が感じる不満を表わす手段」(BP: 223=238) ともなりうるとゴフマンは指摘する。だが、その潜在的行為者は、関係の「弱者」側であり、あからさまな反抗、反逆、違反行為は、相当の力と覚悟がない限り、排除や非難の標的となるリスク、実際の危険を意味する。『アサイラム』における「アンダーライフ」は、弱者の「苦境の切り抜け方」だったのであり、『スティグマ』における「ダブルライフ」と情報管理は、スティグマが知られば「信頼を失う」と仮定する人々が常人世界のただ中で身を守り生き延びる術であった。正面对決すれば勝ち目はない、傷つけられ、つぶされてしまうだろうと状況判断せざるを得ない人々の、ぎりぎりの実践であり狡智と言えよう。

### (3) 「パルチザン」の視点

そもそも、状況ないし社会において、規制に対して適合的でないことはむしろ正されるべきではないか、と考える立場はありうる。そうした立場に対して、ゴフマンが向けるのは皮肉混じりの批評的なまなざしである。

ゴフマンは書く。「関与の慣習的行為に従う人は、集まりのあり方を規制する規則が存在することは社会の安寧にとって非常に重要である——(中略)——と感じ」、「規則を破る人々が投げかける疑念に対して何か自衛手段を必要とする」。その一つの方法が、「逸脱者を不自然な者、不完全な人間であると見なすこと」である (BP: 234-235=251-252)。そうすれば、規則の方は問われることなく、それに従っている自分たちの立場も安泰である。こうした議論には、ゴフマンが「状況適合性の規則」とその規則による状況支配、そしてそれに従うことをどう見ていたかが見て取れよう。

ゴフマンは、状況に適合する者とそうでない者の相違についてさらに書く。「状況の要求に対して積極的に抵抗 (actively resist) する者と状況に適合する者との相違のうちで、過小評価されているものがある。それは、抵抗する者は、社会的集まりとは独自の規則をもった生活の一領域であるとはっきり意識するようになるのに対して、状況に適合する者は、状況の慣習的な規則

## 二重性を設える

にそつなくあたり、その結果、自分の行為が準拠している状況の規範に気がつかないことがあるという点である」(BP: 226=242)。一方には、そこに規則がありそれに支配されていることに無自覚なまま従う人々、そんな自分たちの安寧のため「不適切」な他者を排除しようとする人々がいる。それに対して、自分たちの生活と社会的場面が規則に縛られそれに支配されていることを意識し、あるいは苦境において意識せざるをえず、それに抵抗しようとする人々がいる。ゴフマンはさらに言う。「その部屋には多くの扉があり、その扉を通して外に出るのには多くの心理的に正常な理由がある。そして、状況に常に忠実な人はこのようなことを夢想だにしないのである」(BP: 241=259)。規制に忠実であることは、そこから出る可能性を想像できず部屋の中に囚われていることである。部屋は安楽な場所なのであろうか。

G. A. ファインらは、『アサイラム』におけるゴフマンの文体に、精神病院や精神医療的業務に向けられた皮肉、「パルチザン」的な見方を読み取る (Fine and Martin 1990: 109-110)<sup>(11)</sup>。ゴフマンの見方では精神病院は、「ある人々の生活を、他の人々の犠牲の上に、より安寧なものとする」上で「機能的」な施設である (Fine and Martin 1990: 110)。『集まり』の結語でゴフマンは、「精神病院」を必要としているのは、私たちの日常的な「集まり」であると明言する。「法的秩序を乱す者が刑務所に拘置されるのと同様に、不適切な行為をする者は精神病院に収容される。前者はわれわれの生命と財産を守るための施設であり、後者はわれわれの集まりと社会的場面を守るための施設である」(BP: 248=267)。共在において私たちに要求されていることは、パルチザン、ゴフマンに言わせれば、「求められるときはいつでも完全に均質なパフォーマンスができると信頼される一種の精神の官僚制化 (bureaucratization of the spirit)」(Goffman 1959: 56=64) なのである。

### (4) 共在経験の一般的形式

一方の「状況に常に忠実な人」に対して、他方「積極的に抵抗する者」は、規則とその支配から距離を取ろうとする、いわば自由になろうとする者である。見てきたように、ゴフマンの議論において、そうした人々は「不適切」な「弱者」の側にあり、そこでゴフマンが浮かび上がらせたのが、「二重性」を設える、という術、実践であった。

ではそれはいかにして可能なのか。ゴフマンの次の論述に注目したい。「状況適合性の範囲は、人々が一緒に居合わせている時におたがいに経験し合うことのできることで構成されている。しかし、経験の過程はいろいろな形で妨げられる」(BP: 42=47)。

このごく簡潔な文で述べられていることは、いわば全く自明のことだが、極めて重要である。すなわち、居合わせる人々は互いを経験し合うということ、そしてその経験は互いに限定的であること、これは、私たちの共在の一般的な、しかも不可避免的な経験の形式にほかならない。そのことが二重性の設えを可能にする条件をなしている。二重性の設えとは、この条件を積極的に利

用することである。つまり、そうしようとするならば誰にでもあらゆる状況においてそれは可能なのである。

#### 4. 二重性の設えの実践

では、二重性の設えは、具体的にどのように実践されうるのか。3著作では多様な便法、実践の具体的なありよう、事例が、本稿では立ち入らなかったが、考察された。それらは、総じて「生活上の些細な行為 (the small acts of living)」(AS: 181=192) からなる。ここで、日常生活において身体を包囲する権力の網の目のなかで、私たちはいかに振る舞い生きうるのか、という最初の問いに戻り、「二重性の設え」が持ちうる可能性、そのありうる形を素描してみたい。

二重性の設えは、一方では『アサイラム』や『スティグマ』で描かれたように、その場の「苦境の切り抜け方」として実践されうるが、他方では、個々の共在場面に限定されない、より広範囲で長期間にわたる二重性の設えも、小さな実践の組み合わせと積み重ねによって可能となる。

大日方悦夫は『満州分村移民を拒否した村長——佐々木忠綱の生き方と信念』(2018)において、戦時中の満州分村移民という「国策」に、佐々木忠綱が長野県大下条村村長としていかに対応したかについて、当時の資料と証言を読み解きながら描いている。それによれば、国が「過剰農家」を満州に移住させる「分村移民」を推進するなか、その対象となった長野県の村々では多くの移民が送り出されることとなった。しかし佐々木は、事前の現地視察団に参加し、その実情に疑問を抱くようになり、大日方の言葉によれば「国策に背いて満州への分村をしなかった」(大日方 2018: 6)。大日方は当時の村政について、「総力戦下の国策遂行を第一任務とする“国の下級機関”的側面が、極度に強化された時期だった」とし、「満州移民を公然と批判したり、分村移民を公然と拒否したりすることは現実的でなく、できない選択だった」(大日方 2018: 137)と述べる。では佐々木に何ができたのか。

大日方は、佐々木の国策拒否を跡付ける史料は戦時下で残されるはずはなく、また事実として残っていない(大日方 2018: 140)としつつ、当時の村会会議記録等を丁寧に辿りながら、佐々木が行ったこと(行わなかったこと)を浮かび上がらせる。詳細は省くが、当時村長には移民を早期に実現する義務が課せられていたが、佐々木村長在任中の村会の記録には、さまざまな案件が村の生活上優先度の高い議題として並ぶ中、移民に関するものが殆ど上がっていない。分村問題が取り上げられた数少ない機会には、「丁寧かつ慎重」な議論によって、移民の具体化に繋がるような決定が何一つなされていない(大日方 2018: 140-144)。

大日方はこうした佐々木の対応を、「積極的推進」に対する「消極的姿勢」(消極的抵抗) (大日方 2018: 138)、「個人の段階におけるぎりぎりの抵抗」(大日方 2018: 152)と表現する。国策を公然と拒否できない状況下で、村として移民に向けた取り組みをしていないようには見えず、しかし可能な限り「減速」(大日方 2018: 138)させ時間を稼ぎ、結局は行わない。これによって、

## 二重性を設える

大下条村は犠牲を抑えることができたと言えたと大日方は述べる。国の要求を「拒否する」のではなく「躲す」「回避する」「不履行」「不作為」が達成されたと言えるのではないか<sup>(12)</sup>。

## 5. おわりに

権力の網の目の中で、私たちはいかに振る舞い生きうるのか。この問いを出発点に、本稿では、セルトーの「日常的実践」への関心を共有しながらゴフマンに着目し、「二重性の設え」というモチーフを析出し、その実践、術としての可能性を考察した。とはいえ、本稿の考察は、ゴフマンの議論の検討として未だ十分でなく、またゴフマンの議論とセルトーの議論の関係についてもさらに検討を要する。重要でありながら取り上げることのできなかった論点のいくつか、差し当たり3点を今後の課題として挙げたい。

まず、ゴフマンの議論の検討としては、より広く彼の仕事に視野を広げる必要があることは言うまでもないが、3著作の範囲内でも十分に扱えなかった問題として、二重性の設えを支える諸条件についてさらに整理するという課題がある。具体的には、空間構成、身体表現、情報管理、人間関係の非公式のネットワーク等である。空間構成について、ゴフマンは、施設内の様々な場所・局域（AS: 227=234）、個人の空間世界の分割（ST: 83=142）、物理的距離の維持（ST: 99=169）等について考察している。二重性の設えは他にも、身体表現と情報管理、さらに他者との協働ないし非公式な「共謀」のネットワークにも条件づけられる。これらについてさらに整理する余地がある。

次に、ゴフマンの議論とセルトーの日常的実践をめぐる議論との関係についても、より踏み込んだ検討が必要である。セルトーの「逆向き」の問いは、規律化のメカニズムに従いながらもそれを反転するもの、反規律の網の目を形成していく創造性へと向けられる。二重性の設えは確かに、「従いながら背く」（IQ: XL=22）技法に迫るものと考えられるが、セルトーの論じる創造性との関係についてより丹念な検討を要する。自制的第二次的調整とアンダーライフは、組織を攪乱しない努力とともに潜行する。ゴフマンはこうした「調整」の「保守的」性格（AS: 199=427-428）について、注において言及せざるをえなかった。また、ゴフマンの描くスティグマ者は「過社会化されている」とも批判された（Kitsuse 1980: 5）。そしてまた「役得」は恐らくは利己的動機から確保される。二重性の設えは、規制を確かに躲しはし得ても、その力を押し返したり変えたりするまでにはそれ自体として至らない。ならば「抵抗」し「反規律の網の目」を形成するとはいかなることか、「扉」「出口」への想像力と創造性のありかたがさらに問われなければならない。

最後に、ゴフマンとフーコーの関係について、方法上の補完関係を越える問題が改めて浮上する。二重性の設えは、私たちの経験の一般的形式を積極的に利用するものである、その限りで、誰にでもいつどこでも可能である。だが、実際には「状況に忠実な人」と「積極的に抵抗する



者」がいる。満州移民政策においても、多くの村は国策に従い、佐々木の村内にも従おうとする人々はいた。事実それが多数派である。では、人はいかにして「抵抗」する者となるのか。ゴフマンは、「頑強な抵抗 (recalcitrance)」を「自己に本質的な構成要素」(AS: 319=315) に他ならないと主張した。この仮定は、改めてフーコーへと私たちの目を向かわせる。周知のようにフーコーは、主体形成を権力に依存するものとして論じた。フーコーの論を受けてバトラーは問う。「私たちは権力を、外部から主体に圧力をかけるもの、従属化し、下位に置き、より低い序列に追いやるものと考えることに慣れている」。「しかし、フーコーに従って、もし私たちが権力を、主体を形成するものであり、主体の存在の条件そのものと主体の欲望の軌跡を与えるものであると理解するなら、そのとき権力とは、私たちが対立するものであるのみならず、強い意味で、私たちが自分の存在のために依存するもの、私たちが現在の自分の存在の中に隠匿し、保持しているもののことである」(Butler 1998=2019: 訳10)。ならば、私たちはゴフマンの仮定に留まることはできない。フーコー、バトラーの言は、ゴフマンの主張の掘り下げを要求しており、これは本稿では手付かずの課題である。

以上、残された課題は大きいが今後の課題とし、本稿はここで終えることにしたい。

付記：本研究は JSPS 科研費22K01938の助成を受けたものである。

#### 注

- (1) 以下、割注内頁表記 =以後は邦訳書の頁を示す。
- (2) それゆえ本書は精神障害のための施設研究として主に論評され参照されてきた (Gronfein (1992)、Shalin (2014) 等)。
- (3) 詳しくは草柳 (2015)。本書を一般的な水準で読み解こうとするものとして、Ewick and Silbey (2003)、日本では天田 (2015)、薄井 (2020) 等。
- (4) “being” は、邦訳書で「存在様態」だが、原語の平易さに照して変えた。以下同様に邦訳は適宜訳し変えている。
- (5) 本書本論の二～三に詳述されている。なおこれらは、セルトーの「使用」「消費」「隠れ作業」(IQ: 52, 51=109, 108) 等と呼応する。
- (6) 営造物、施設、組織の並列については同書 (AS: 175-176=186-187)。
- (7) この二層のアイデンティティ設定は、『アサイラム』における、組織の非明示的仮定と、その仮定を継ぐ人々のありようの対比と、形式的にはほぼ同型である。ただし『アサイラム』の后者は、組織の仮定を「受け入れない」という当人の態度によって保持され、『スティグマ』の后者は、人々の仮定通りであることがままならない、という違いはある。
- (8) 同モチーフは、ゴフマンの研究を通じて繰り返して変奏されている。例えば『行為と演技』(1959) では、劇場のパフォーマンス、後期『フレイム分析』(1974) では、経験の組織化という水準で同じモチーフを見出だしうる。
- (9) To find a way of avoiding a difficulty or a rule (Oxford Advanced Learner's Dictionary).
- (10) To move quickly and suddenly to one side in order to avoid sb/sth (注9に同じ)。

- (11) 同様の指摘は他にも多い (Fine and Martin 1990)。
- (12) 同様の「不履行」には多くの事例があるだろう。それらは、公的記録に残りづらいが、非公式に人から人へと伝えられていくだろう。セルトーの知識と記憶に関する議論が参考になる (IQ: II-6 章)。

#### 引用指示文献

- 天田城介, 2015, 「修理屋モデル＝医学モデルへのハマらなさこそが極限状況を招く」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学』新曜社. pp.188-216.
- Butler, J., 1997, *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, Stanford University Press. (=2019, 佐藤嘉幸・清水和子訳『権力の心的な生——主体化＝服従化に関する諸理論』月曜社.)
- Certeau, Michel de, 1990, *L'invention du quotidien 1 Arts de faire*, Gallimard. (山田登世子訳, 2021, 『日常の実践のポイエティック』筑摩書房.)=IQ
- Dennis, A., R. Philburn & G. Smith, 2013, *Sociologies of Interaction*, Polity Press.
- Ewick, P. and S. Silbey, 2003, "Narrating Social Structure: Stories of Resistance to Legal Authority," *American Journal of Sociology*, Vol. 108, No. 6, pp. 1328-1372.
- Fine, G. A., and D. D. Martine, 1990, "A Partizan View: Sarcasm, Satire, and Irony as Voices in Erving Goffman's *Asylum*", *Journal of Contemporary Ethnography*, Vol. 19 No. 1, pp.89-115, Sage Publication.
- Foucault, M., 1975=1977, *Surveiller et Punir: Naissance de la Prison*, (=田村俣訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社).
- Foucault, M., 1972, *Histoire de la folie a l'age classique*, (=田村俣訳, 1975, 『狂気の歴史——古典主義時代における』新潮社).
- Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday Anchor. (=石黒毅訳, 1974, 『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房).
- , 1961, *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, Doubleday Anchor. (=石黒毅訳, 1984, 『アサイラム施設——被収容者の日常世界』誠信書房). =AS
- , E., 1963a, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, The Free Press. (=丸木恵祐・本名信行訳, 1980, 『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房). =BP
- , E., 1963b, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall. (=石黒毅訳, 2003, 『ステイグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房). =ST
- , E., 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Northeastern University Press. =FA
- Gronfein, W., 1992, "Goffman's Asylums and the Social Control of the Mentally Ill," Gary Alan Fine and Gregory W. H. Smith (eds.), 2000, *Erving Goffman Volume III*, Sage Publications, 255-279.
- Hacking, I., 2004, "Between Michel Foucault and Erving Goffman: between discourse in the abstract and face-to-face interaction", *Economy and Society*, 33:3, pp. 277-302.
- 草柳千早, 2015, 『日常の最前線としての身体——社会を変える相互作用』世界思想社.
- Kitsuse, J. I., 1980, "Coming Out All Over: Deviants and the Politics of Social Problems," *Social Problems*, 28(1): 1-13.
- 大日方悦夫, 2018, 『満洲分村移民を拒否した村長——佐々木忠綱の生き方と信念』信濃毎日新聞社.
- Shalin, Dmitri N., 2014, "Goffman on Mental Illness: Asylums and "The Insanity of Place" Revisited," *Symbolic Interaction*, 37(1): 122-144.
- 薄井 明, 2020, 「全体主義と『アサイラム』 — E・ゴフマンを強制収容所と全体主義社会の主題に導く四つの繋がり —」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』27号, pp.11-26.